

特集●貴司山治と〈占領・開拓〉の時代

## 胡麻郷開拓とその後継者たち

開拓者・中澤昌平さんに聞く

### 胡麻の開拓者たち

戦争末期のころ、わたしはまだ子どもでしたが、両親とともに胡麻郷村で農地の開拓をしておりまして。あるとき、「危険思想者」がこの村に来るぞという噂を、役場の職員をさせている向かいの家の奥さんから、母が聞いてきました。それが貴司山治さんと谷口善太郎さん<sup>①</sup>でした。

そのとき貴司さんがお住まいになったのが、国民学校の下の保育所のお隣りの中川さんという養鶏場やったんですよ。戦争中で、養鶏場には餌がなかったので、ニワトリはほとんどいなかったんですが。その鶏舎を仕切つて、谷口善太郎さんと背中合わせに住んでおられたのを覚えています。貴司さんのところはものすごく都会的な若い奥さんがおられて、それとは対照的に、谷口さんの奥さんは本当に農婦というような雰囲気のかたでしたね。あと谷口さんご夫婦には小さな養女の子がおられましたね。

わたしの親父が養鶏場の中川さんと親しかったので、二度三度、谷口さんと貴司さん宅を、一緒に訪ねて行つたことがあります。家をのぞいたら、本棚も何もない時代ですから、本がずっと壁にそって一段に並んでいるん



です。たくさん本にわたしたちはとても感心していました。貴司さん宅に中学生の息子さんがおられたことも記憶にあります。その私と同年配の方が貴兄（伊藤）でした。

谷口さんは別に近所の武内さんの離れの二階を書斎に借りて、執筆活動をされていました。

その武内さんなんかも出入りされていたようですが、谷口さんは戦後すぐにマルクス・レーニン主義の研究会なんかも開いておられたと聞いています。この間も、当時、小学校のあたりのお家に行っていたことがあるよという女の人から手紙をもらいました。

わたしはどっちかいうたら、社会主義者、社会党とか共産党とかのほうが好きでしたけど、そうした研究会に入ったり、活動したりということは、今日までついになかったですね。なにかちょっと勉強が少なかったから、そういうところに行くのに劣等感を持っていたんやと思います。小学校も卒業してないんですよ。戦時中の開拓者の家は貧しかったし、わたし自身は体も弱かったしね。わたしが旧国民学校高等科二年生のとき、学制改革で六三三制になって、行きたかったら園部中学（現府立園部高校）でもう一年勉強して、さらに新制高校に行けたんですけど、その年の半分ぐらいは学校に行って、あとは一生懸命開拓しとって、行かずじまいでした。

でも胡麻郷校で一番二番は、みんなよそから来た開拓者の子ばかりだったんですよ。開拓の子らは勉強さしたらみんな、よくできていい学校に行きました。

あと、貴司さんやら谷口さんは、終戦後に農民組合をつくられていますね。あのころの村の優秀な連中はみんな、谷口さんなんかのところに行って、農民組合をつくる相談をしたりしとったと聞いています。その後、農民組合も開拓農業協同組合みたいなかたちになりました。ちょうど京都府は革新府政やったんで、当時の開拓の指導者たちは府庁を肩で風切って歩いとったといわれていました。農業協同組合が開拓に積極的に取りくんで、それが京都府中に広がっておりまして、わたしたちもその支援を受けることができました。<sup>(2)</sup>

たとえば、このあたりは強酸性土壌でぜんぜん作物はとれないし、水かけの水もなかったのですが、そうした



ときに雨水を貯め込むためのコンクリートの水槽を補助金でとってきたりしていました。「炭カル」など大量に無料でいただきました。また、そのころ入植された人は満洲からの引揚者が多くて、本当に悲惨な生活を送られていたんですが、それに助けられた人もいます。

谷口さんのほうは、一九四九年に共産党公認で京都府第一区から衆議院に立候補されて、二度目の挑戦でみごと当選されました。当選されると思っていなかったのです。

そのころのことなんですが、開拓地で生活するのにいちばんお金になるのがスイカでして、うちだけでトラック一台ぐらいのスイカを作っていたんですよ。すると谷口さんが、共産党の京都の事務所ですべてあげるわ、と言われたので、持って行ったことがあります。でも、しばらくして共産党の若い連中が、売上みんな食いつぶしてしまったんですよ。いまの若い奴はけしからん、というて谷口さんと親父が怒っていたのを覚えています。

ところで肝心の農地開拓のほうはといいますと、終戦前後のことですから、田舎に食料品店があるわけやなし、自分の食うものは自分で作らなかんような時代でした。うちの畑の一部を、中川さんのお世話で、貴司さんと谷口さんにお貸ししたことがあります。貴司さん谷口さん一家が総出で作りに来られました。二回か三回くらい来られたけどそれっきりになってしまつて、これはそう簡単には作物はできんと観念されたような感じでした。

貴司さんのところも執筆活動やらがこんなところでは無理やったんや

ろうと思いますが、戦後しばらくしてお帰りになりました。谷口さんのほうも国会議員ですから、京都のほうへ戻られました。

その後はいろんなことがあったけれども、同じように、インテリのかたはみんな帰りましたね。結構優秀な人がおられたんだけど、土地をかうという業者が来たときに、渡りに船やというような感じでみんな売られて、帰ってしまいました。

わたしも本当はもう百姓がいやで京都に帰りたくてしようがなかったけど、そんな道はなかったしね。最終的には、新田という集落（胡麻・下山開拓地で最も多人数が入植した地区）でも牛飼いをして残った人は三軒か四軒ですし、こっち（新町地区）も農業専業で生活しているのはわたし以外に三軒か四軒です。そういうことで、戦後の開拓行政は失敗したのかなと思うほどの状況です。

## 後継者たち

貴司さんのところで書生をされていた青木さんは、同じ頃にお手伝いをされていた奥さんと、そこで結ばれたそうですね。このかたは最後までここに残っておられましたけど、途中で京都市の中央市場に勤められました。この前伊藤さんが来られたときには、奥さんが泣いて喜んでほったと聞いています。ここの家は、息子さんのほかに娘さんがたくさんありまして、家を出て働いておられたんですが、その子らに土地をやると思ったら、みなそこに家を建てて、最終的には胡麻郷に帰ってこられました。これは違う意味での農村後継者ですね。

わたしも息子と娘がいるんですが、子どもたちに農業を継がすことができませんでした。わたし自身何の教育も受けていないので、子どもにだけは石にかじりついてでもいい教育をさしてやりたいと思いました。そうなる  
と農業だけでは食えんわと思ひまして、いちど百姓から職業的な浮氣をして、とれたものは自分の手で売ろうと、

産地直送をはじめました。そうしたおかげで、子どもを大学なり短大なりに行かせられたんですが、そうした考  
えが罰が当たって絶対百姓してくれません。それだけはいまわたし自身、気持ちとしては悲しいんですが、自分  
の息子がしてくれなくても、だれかがこの土地を有効に使って、農業をしたらいいと思っています。

京都府に新規農業就労者を受け入れますと申し入れているんですが、世間ではたくさん農業をしたいという人  
がいるもんですね。しかし、昔、教育を受けた人がみんな挫折して帰ったという事実を知っていますし、ひとり  
もんは受け入れたら絶対だめだとつくづく思います。農業はシングルではできない。ダブル、夫婦じゃないとで  
きないです。シングルで来られたら、結婚相手を探すのやらなんかが大変です。それが原因で、せっかく優秀で、  
自分自身も燃えて農業に賭けるというて来た人が挫折するのが目に見えています。

いまわたしのところではひとり二階にあずかっております。その二階の住人は、貴司さんが以前住んでおられ  
たところの近く、いまはパン屋さんになっていますが、その横にビニールハウスを建てて働いています。新規就  
労者には、京都府から最初の二年間は、営農支援資金というのを月額一〇万円くらいくれるんですよ。五年以上  
ここに住んだら返さなくてもいいんですが、途中で挫折したら返さないといけないんです。彼もそれをもらいな  
がら気張ってやっています。昨日なんか忙しくてくたびれましたというて、うちに報告に来ていました。一目で  
三万円くらい、だいたい二日分の野菜を出荷しました。そのとき忙しいことが楽しみですわというてたんです  
が、欲がついてきたら、しめたもんです。

そうした若い人が四組も完全に村の人、地元の農業後継者になりました。応援しているわたしにとっては勲章  
です。わが人生に悔いなしです。

二〇一一年五月一五日、京都府南丹市日吉町胡麻新町（旧船井郡胡麻郷村胡麻）中澤昌平氏宅にて

（文責・編集部）

注

(1) 谷口善太郎(一八九九年―一九七四年)は石川県出身、京都に出て清水焼陶工となり労働運動に投じる。三・一五弾圧以降プロレタリア作家となり「綿」「清水焼風景」などを書く。筆名加賀耿二、須井一。戦前貴司と親交あり、雑誌『文学案内』にも「血の鶴嘴」など多くの小説や記事を書いている。貴司の胡麻郷入植は谷口の勧誘による。しかし戦後は著しく不仲になった。一九四九年いらい衆議院議員に日本共産党公認で六回当選。

(2) 一九四六年、胡麻郷開拓農民組合設立、六月の臨時総会で貴司が組合長に選出される。この頃既に全日本開拓者連盟、京都府開拓農民組合も組織されており、当時、開拓農民運動は全国的に盛り上がっていた。一九四八年には全国開拓農業協同組合も結成されている。

## 中澤昌平さんのこと

伊藤 純

胡麻郷は、京都から日本海に向かう山陰線が丹波高原を越えていく、その分水界に広がる美しい高原地帯である。七十年近い昔、私たち一家は、この胡麻郷に疎開者兼開拓農民として三年近くをすごした。わずか三年のことだが、余りにも美しいその高原の風光は、なにやら見当違いなことに四苦八苦してすごした疎開開拓民としての記憶と併せて、深く心底に刻まれている。

ふとしたことから、その胡麻郷に、同じ頃入植し今も農業を続けられているだけでなく、蔬菜栽培で中山間地農業経営に一つの方向を見出し、後継者の育成にも成功されつつある方がおられることを知った。

それが中澤昌平さんだった。

以前にも一度伺ってお話を聞いたが、一昨年（二〇一一年）には、占領開拓期文化研究会の人々と、貴司が入植し農民運動をした土地の实地踏査に、ハイキングをかねて胡麻郷を散策し、再度中澤さん宅にもお邪魔して、お話をうかがった。そのお話では、農民運動はともかく、開拓農民としては貴司は全然ものにならなかったことがはしくも暴露されてしまったが、それはもう、かねてから私も思っていたことである。

中澤さんは無教会派の敬虔なクリスチャンだが、人と時代を見る目は、なんの偏見もなく、澄んでいる。私は中澤さんのお話を信じるのである。

#### 〈中澤昌平さんの略歴〉

一九三二年、京都市生まれ。家業は米穀商。一九四三年、米屋を止めて亀岡に疎開。一九四四年、胡麻郷村に内地開拓者として入植。一九四五年、胡麻郷小学校を卒業、高等科中退。一九五一年、入信受洗。一九八五年、米作に代わってハウス農業に活路を見出す。以後、京都府伝統野菜生産地創設事業で「壬生菜」栽培を展開。併せて新規就農者の受入農家指定を受け、後継者の受け入れ指導に尽力。はこぶね労務農園主宰、全国愛農会理事、常任理事などを歴任。著書に『愛農の灯火一隅を照らす』（社団法人愛農会、二〇〇八年）がある。

